

廣池千九郎と天理教本島支教会（一）

立木 教夫

目次

- 一 はじめに——本島支教会滞在の意義
- 二 モラルサイエンス研究の進展
- 三 本島支教会との出会い

一 はじめに——本島支教会滞在の意義

廣池千九郎は、七十二年（慶応二年〔一八六六〕）から昭和十三年〔一九三八〕の生涯のうち、五十三歳から五十八歳（大正八年〔一九一九〕）から大正十三年〔一九二四〕の五年数ヶ月の間に、瀬戸内海にある天理教本島支教会を定期的に訪れ、滞在した。その目的は、静養、講習会開催、そして研究にあった。

本島滞在の三つの目的は一体化していたといつてよいであろう。つまり、廣池は、本島に滞在し、静養し

ながら「モラルサイエンス」の研究に取り組み、その研究成果の一端を講習会で布教師に講義し、実地の感觸を得ながら研究をさらに前進させていったのである。

この「モラルサイエンス」は、後に学名を「モラロジー」と確定され、昭和三年十二月二十五日に「新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての」という言葉を冠した『道徳科学の論文』（以下、「論文」と略す）として発行されることとなる。本島支教会との関係は、「論文」の成立過程とも関係する事蹟なのである。

本稿では、序論的に、モラルサイエンス研究の文脈から見た廣池と本島支教会との出会いを明らかにしておきたい。次稿以下で、講習会、研究、生活の様子、人物交流などを取り上げて行くことにする。

二 モラルサイエンス研究の進展

はじめに、廣池が大正八年に本島支教会との出会いを得る以前の時期に注目し、モラルサイエンス研究の構想がどのようにして生まれ、展開されていったのかを、考察しておくことにしよう。

廣池は、いつ頃からモラルサイエンス（すなわち後の『論文』）の構想を抱いていたのだろうか。これについては、いかなる点に着目するかで、構想を抱きはじめた時期は変わってくる——すなわち、中国法制史研究でとらえるなら明治二十六年頃、日本皇室の研究でとらえるなら明治三十年頃、労働問題との関連で人類社会統制の方法の研究を開始したことととらえるなら明治四十三年頃、道徳実行の効果を科学的に立証する研究や、学校の道徳教育を有効なものにするための研究との関係でとらえるなら、明治二十五年以前に遡

るといった具合で、さまざまな可能性が考えられる⁽²⁾。しかし、廣池の全体的研究からするなら、それらすべての関連要因を一点に焦点化する出来事、すなわち「大正元年の大患」を最も重要な契機として捉えることができるものと思う。

廣池は、大正元年九月二十日ごろから「風邪」となり、病状は次第に悪化し、同年十二月六日に最悪の状態に陥った。このとき廣池は、それまでの歩みを回顧・反省し、神に向かって聖人の教えの真髄を書き残し、自ら人心救済に努力するとの誓いを立てた。これが『論文』に結びつく最初の明確な出発点となったのである。

廣池は次のように述べている。

ここにおいて同夜、私は神様に向かって、改めて祈願をしたのであります。その祈願の主旨は、「今日の大患にては、とうてい生命のあるはずなけれど、もし神様が私に一年の生命を貸してくださいならば、人心救済に関する世界諸聖人の真の教訓に本づくところの前人未踏の真理を書き残しておきましょう。もしまた、さらにこれより永き生命をお貸しくだされますれば、当年「明治四十五年」一月四日にお地場にて誓いしごとくに、私の学問、名譽及び社会の地位全部を神様に献納し、生きたるままに神前の犠牲となつて人心救済をさして頂き、全人類の安心、幸福及び人類社会永遠の平和の実現に努力さして頂きましょう」ということであります⁽³⁾。

これ以降の廣池の歩みは、このときの神に対する誓いを核として、そこからすべてが構想され、展開され

ていくことになる。

大患直後の大正元年十二月二十七日に、天理教初代管長中山眞之亮氏は、幹事松村吉太郎氏を勢山支教会に派遣し、廣池に天理教本部入りを要請した。そのとき、廣池は、天理教本部は「人心救済をなすには適當の場所」と考えて、本部入りの要請を受け入れたのであった。

廣池を本部に迎えた中山管長は大正三年十二月三十一日に急逝し、大正四年一月十二日に追悼講演会が行われた。廣池はここにおいて故管長とともに協議しつくり上げてきた天理教改革プランの一端を明らかにしたのである。この講演内容は、一部の幹部の逆鱗に触れ、廣池は天理教本部における職を解任されることとなった。このときも廣池は、大正元年の神に対する人心救済の誓いに基づき、自らの進むべき道を確定している。そのときの心境は次のようであった。

当時の私は先輩も友人も知人も、親族家族よりも見放されておるのに、更に天理教の本部ならびに教会から追放されたのであります。かつ私には一厘の貯金もなく住宅もなく、学者の唯一の武器たる蔵書もすでになくなっておるのであります。ただこの間に残存せるものは、極めて弱き病気の肉体のみであったのです。ただしこの場合においても人心救済の大目的を打ち捨てて、自己の生活を図るためであったならば、先輩でも友人でもその他幾多の実業家でも、私を歓迎するものはたくさんあるのですが、先年大患の時に神様に対して、人心の救済及び世界永遠の平和の基礎の確立を誓うたのでありますから、今においてこれを変ずることはできぬのであります。それゆえにあらゆる人々の同情も親切も、私には何の力にもならぬのであります。そこでかくのごとき無一物の中から人心救済、世界平和等のごとき大

事業の基礎を確立せねばならぬのであります。

これをもって全然自我を没却して神の心の中に入り込んで、神の法則に従い神の慈悲心を実現するより外、道はないのであります。さればこの時に至って再びつらつらいわゆる神の心、神の性質及び神の法則を考えたのであります。これが多年研究しておったところの国体論の研究より、進んで最高道德の全部の研究となり、遂に後年に至って新科学モラロジーを確立するに至った一つの原因となったのです。

天理教本部における職を解かれ「無一物」となった廣池は、「全然自我を没却して神の心の中に入り込んで、神の法則に従い神の慈悲心を実現するより外、道はない」という状況の中、大正元年の神に対する誓いを守りながら、自らの進路を切り開いていったのである。例えば、「生きたるままに神前の犠牲となって人心救済をさして頂き「ましよう」という誓いは、日本全国各地を巡回講演し、實地に人心救済を手がけるという具体的実践へと展開し、また、「人心救済に関する世界諸聖人の真の教訓に本づくところの前人未踏の真理を書き残しておきましょう」という誓いは、「大正四年以降始めて、具体的に『道德科学の論文』へこの時には単に書名をザ・モラル・サイエンスととなえておりました」の内容の組織に着手し、かたわら必要なる内外の書籍の購入に着手」するという新たな段階に突入することとなった。

大正四年から同八年に至る研究の展開を、『廣池千九郎日記』（以下「日記」と略す）によって、たどっておこう。

大正四年十一月二十八日には、「一切の研究、みな人を助くるためにするものなり」と記し、十二月二十

四日には、「御道の心をもってやること。研究中にその心を入れること。結果は人類に貢献のこと。世界の人類に法の目的と将来の方針とを示し、天理教の精神を普及す」と、研究を通して、神への誓いを実現する方法を考えている。

大正五年元旦には、「決心」として、「いかなる事あるも部下の人々に相談して、この道を離れることなし。而してその間に、一方には道を開き、一方には専門学を進めて、必ず必ず大成の域に達するを期す」と記し、「道」の開拓と、「専門学」の研究とを共に推進し、大成の域に達することを誓っている。

しかし、この方針は、わずか半年の後に変更されることとなった。大正五年六月六日の「日記」には、「懺悔」として、「全く心を立てかえて、御道一筋の研究と、御道一筋のつとめをさして頂くこと」「法制史その他学文的研究は三年中止」とある。廣池は、専門学研究を一時中止して、「御道」を中心とした「研究」と、「つとめ」すなわち人心救済に集中することにより、神への誓いを実現しようとしている。ここに「研究」は「御道」中心に再組織され、そこにはもはや、「必ず必ず大成の域に達するを期す」と強く誓いを立て推進してきた専門学研究は含まれていない。ここに来て廣池は、「全く心を立てかえ」「この必要性を改めて強く感じ、そのために必死に切り拓いてきた専門学研究を三年間もの長い期間にわたって中止する決心を固めたのである。

「日記」を見る限り、確かに三年間、専門学に言及した記事は一つも見つからない。廣池は、「法制史その他学文的研究」を三年間中止し、「全く心を立てかえ」「このことに集中したのであるが、具体的には何を行っていたのであろうか。それは、国民道徳講演会の講師として、日本全国を巡回し、実地に人心救済を手がけるということであった。

次に、その間の活動の主なものを、一覧表にして示しておくことにする。

《年月日》	《地方》	《日記?》
大正五年三月三〇日から四月一八日	長野・新潟・福島・茨城県	一一一三
七月三一日から八月三日	静岡県	五三
八月一四日から三〇日	静岡県	五三
一〇月五日から一四日	長野・群馬県	五六
一二月五日から一四日	長野県	六〇一
大正六年三月一日から八日	埼玉県	六六
四月二六日から五月七日	北陸地方	七一三
五月一六日から六月七日	山陽・山陰地方	七六九
七月三日から一三日	愛知県	八〇
七月三一日から八月四日	東京府	八一
八月五日から一三日	神奈川県	八一二
九月二日から一〇月二日	北海道・東北地方	八二四
十一月二〇日から十二月二〇日	鳥取県	九〇四
一二月三日から二五日	静岡県	九四
大正七年一月五日から一五日	長野県	九七八
二月一日から七日	大阪府	一〇五七
二月一二日から一五日	兵庫県	一〇七

二月一六日から五月一三日	山陽・九州地方	一〇八二二六
七月五日から九日	埼玉・茨城・栃木県	一一二八
七月二〇日から二四日	大阪府	一一九一三〇
七月二六日から八月二日	大阪府	一一三〇一五
八月一五から二一日	大阪府	一一三四
八月二二日から九月一一日	鳥取県	一一三五一六
九月一五日から一〇月一〇日	九州北部・山陰地方	一一三六一四二
一一月一日から一六日	愛知・岐阜・三重県	一一四三一五
一一月一八日から二二日	大阪府	一一四五一六
一一月二九日から一二月一〇日	山陰地方	一一四六一七
大正八年一月二日から八日	静岡・愛知・三重県	一一五一一三
一月一日から二四日	大阪府	一一五九一六〇
一月二九日から二月四日	大阪府	一一六一
二月六日から三月二七日	香川県・徳島県	一一六一一七

ざっと概観しただけでも、この間に、北海道から九州まで日本全国を巡回しながら講演を行っていたことがわかる。

大正八年になると、『日記』には、はじめて、「モラルサイエンス」という語が登場してくる。⁽¹¹⁾ 人心救済の活動に邁進する中から、大正元年に神に対し「人心救済に関する世界諸聖人の真の教訓に本づくところの前人

未踏の真理を書き残しておきましょう」と約束した誓いは、「モラルサイエンス」と命名されるところまで、構想と内容が煮詰まってきたのである。

この「モラルサイエンス」という言葉は、「モラロジー」および『論文』の成立過程を考える上での重要なキーワードであるので、その正確な初出時期を確認しておくことにしたい。

大正六年二月十五日、浅草蔵前東京高等工業学校講堂で「工場主の利益の保護と職工の幸福獲得の方法に就いて」と題する講演を行い、廣池は「サイエンス・オブ・モラル」という言葉を使っている。⁽¹²⁾ これは「道徳の科学」という意味であり、「モラルサイエンス」に近い言葉が使われていたことがわかる。

また、同年十一月二十一日から十二月十五日にかけて行われた、鳥取県下の地方改良講演会では、表題に「エシックスとモラル・サイエンス」とある。⁽¹³⁾ これが、「モラル・サイエンス」という言葉が使われた最初の記録である。

さらにまた、大正七年二月五日、大阪府南区教育会で「国体論」と題して行われた講演では、いっそう明確に、「(八) 道徳に合するものは、何故に科学的なるか、今日までは此の事を説明するの機会なかりしなり。然るに近時人類学、社会学、⁽¹⁴⁾ 並に法制史、政治学等の発達に伴い、人類の文化は道徳にある事を発見せり。(九) 是に於てか、倫理学の外、新たに道徳科学の現出を促す事となるに至り、前記諸科学の暗示を基礎として、予は数年前より之が研究に従事せり」と述べている。これが「道徳科学」を「モラルサイエンス」と表現した最初の記録であり、この時点ですでに数年前から研究を行ってきたということがあるから、当初は「モラルサイエンス」という名称なしに、研究が行われていたことを確認できる。

ここにある「モラル・サイエンス」と「モーラルサイエンス」は、「・」の有無に関わらず、同一と考えてよいであろう。これらはさらに「モラル・サイエンス」とも、「モラルサイエンス」とも記されるようになる。そして、大正十五年には、モラルサイエンスの学問体系の確定に伴い、「モラロジー」という学術名が与えられ、「モラルサイエンス」は、昭和三年に『道徳科学の論文』として出版されることとなったのである。

廣池は、大正八年から同十三年の間、原則的に年二回、本島支教会に滞在し、静養しつつ「モラルサイエンス」の研究に取り組み、講習会でその研究成果を天理教の布教師に講義し、実際に人心を開発救済しうる学問へとつくりあげていったのである。

三 本島支教会との出会い

廣池はいつごろから「本島支教会」の存在を知っていたのであろうか。大正八年以前の記録を調べてみた。

非常に早い時期の記録としては、明治四十二年十一月二十日の「天理教調査大要」の中に、「歎喜・和樂の状態にある事」と天理教信者の特色の一つを記した後、「安心立命。貧民皆笑う。近くは本島・東本に行け」と小さな文字で注記されている。¹⁵ ちなみに、本島は、明治四十二年に布教所から支教会に昇格し、それと同時に「片山好造は入信してから七年目の四十一才の時、本島支教会二代会長のお許しいただいた」¹⁶とある。これ以降、本島支教会は片山会長を中心に発展していくことになるのである。

『日記』には、大正四年十月二十日・二十一日に「本島支教会」という記述がある。このとき廣池は本島を訪れたのであろうか。このことに関しては、昭和三十七年に行われた調査の際、大正四年当時の状況を知らる本島支教会の藤山春之助氏（本島支教会会長片山好造氏の娘婿）に確認したところ、「それは多分間違いで、高松の誤りではなからうか」との答えを得ている。つまり、大正四年には、本島に来ていないのではないか、ということであった。

大正八年に廣池は本島支教会を訪れることになるのだが、そのきっかけは本島支教会からのアプローチによってつくられた。本島支教会会長片山好造氏の「私史」を出版した中西史郎氏によると、片山会長は廣池招請の理由を次のように語っていたという。

教祖三十年祭「大正五年一月二十五日」は道の峠であつて、それからさきは高山ずるずるであるから、わしは時句の重大な神さんの深いおぼしめしを粗末にしないよう、高山布教を念じつつけて来たのであるが、残念ながら高貴な人はまだひとりもおらない。そんなことでは神さんに申し開きすることはできず、何としてでも考えて廣池博士に本島へ来ていただくことにした。先生のご身上については、わたくしが神さんをお願いしてご守護をいたさう。その代わりに先生からは布教師に知識を授けていただく。そうすれば、うちの布教師も世の中に通じる広い人間になるであらう。……思索の末、年に二回、春と秋に日を定めて博士から講習をうけたらどうかと……皆がきつと成人してくれる。そうに違いない。だから博士に本島に来ていただくことにした。¹⁸

いよいよ大正八年に、廣池は本島支教会の招請に応じて、本島に出かけていくことになった。しかし、この招請がいつどのようにして行われたのかは、明らかにされていない。この点について、資料を参照しながら、推定を試みてみたい。

天理教本部で交渉を行ったのは、天理教京城支教会の教師、小野亀造・松枝夫妻であった。藤山春之助氏は、次のように述べている。

小野氏は中津の出身で廣池という姓に心当たりがあったので、それならば中津の廣池千九郎博士のことに相違あるまいと思ひ、同時に博士の苦境を知って何とかしたいものと考えた。たまたま大正八年一月、小野氏は本部の大祭「一月二十六日」の時に本部に帰る道すがら、途中先代片山会長のところに立ち寄り、つぶさに博士のことを話した。片山会長はこれを聞き、これは正しく神の思召しとして博士を本島に迎えんとした。片山会長は早速小野氏をして本部へ博士を出迎えにやったところ、意外にも博士はこれを辞退した。再三の迎えにもかかわらず、博士の辞意は強かったが、遂に四度目に、博士は片山会長の人格に打たれて、ようやく腰をもたげてこれに応じた。⁽¹⁹⁾

この「四度目」も天理教本部であったのだろうか。廣池が大祭時に天理教本部にいたであろうことは『日記』から推定できる。一月二十五日については記述がなく、「一月大祭」の二十六日、「青年会発会式」の二十七日、「本部にて」とある二十九日は、本部にいたものと思われるが、二十八日は記述がない。小野氏は、この四、五日の間に四回接触して、廣池の本島行き承諾を得たのであろうか。どうも交渉が成立したとい

う「四度目」は、天理教本部ではなかったように思われる。なぜなら、藤山氏は、廣池は「片山会長の人格に打たれて」招請に応じたと述べているからである。天理教本部で廣池に接触したのは小野氏であり、片山会長ではなかった。会ってもいない「片山会長の人格に打たれて」、本島招聘を受け入れたというのは、多少無理があるように思われる（ただし、小野氏が語った片山会長の人格に打たれて承諾した、という可能性はゼロとはいえないが）。

さらに他の資料を見てみよう。

高野友治氏は『伝道者』の中で、「廣池博士が病氣のため天理中学校をやめて、今、高松に来ていると聞き、早速人を遣わして、教師教育の講師の件を願ったのだった。最初、廣池博士はがんとして聞き入れなかったが、再三の依頼により本島に来たのだった⁽²⁰⁾」と、述べている。これによると、高松でも招聘の交渉が行われていること、また、交渉は代理人が行っており、しかも再三行われたということである。このときの代理人が誰であったのかは、明らかにされていない。いずれにせよ、高野氏の記述によれば、高松での交渉が成立して廣池は本島を訪れることになったということになる。

ここでは、交渉成立は天理教本部ではなかったという可能性を採用し、さらに別の証言を加えて、考察を続けることにしたい。

藤山氏は、「たまたま地方巡教の折、博士の苦境を痛く同情して、博士を迎え容れたのが元本島大教会長片山好造氏であった」と述べている。この「地方巡教の折」という表現の「地方」が、はたして高松を指すものかどうか判然としないし、また、「博士を迎え容れたのが元本島大教会長片山好造氏であった」という表現においても、「迎え容れた」人は片山会長だということはわかるが、廣池と直接交渉をして招聘の約束

を取り付けたのが片山会長本人であったのかどうかはわからない。

廣池が本島に行くようになってから、直接的に廣池の身の回りの世話をされた岩橋健太郎氏は、昭和三十六年六月十四日に行われた調査の際、「博士が本島に関係をお持ちになったのは、博士が高松の講演（大正八年二月二十一日）で、神経衰弱のため倒れたとき、片山会長が同情してつれてきた」と述べている。これまで行ってきた考察の延長線上に岩橋氏の発言を位置づけるなら、廣池招聘の交渉は高松で行われ、「同情してつれてきた」というのであるから、その交渉に当たったのは片山会長本人と見ることができるとはいえまい。

これまでの考察をまとめてみよう。片山会長は廣池を本島に招聘したいという希望をもっており、その交渉を小野氏に託した。小野氏は天理教本部で廣池と交渉したが断られた。次に、廣池が地方講演で高松にやってくるまで、廣池が倒れたとき、片山会長本人が交渉し、招聘に成功した。もし、このような経過であれば、廣池が「片山会長の人格に打たれて」招聘に応じたということも、無理なく理解できるのではないだろうか。

さて、先の記述の中で、岩橋健太郎氏も「片山会長が同情してつれてきた」と述べ、藤山春之助氏も「博士の苦境を痛く同情して」と述べている。二人とも共通して、「同情」という言葉を使っているが、これはどのようなことであろうか。

藤山氏は、調査の際、「片山も神経衰弱⁽²³⁾」と述べている。つまり、片山会長は廣池と同じ神経衰弱を体験していたのである。このことを廣池は「本島支教会長いわく、予三十五年胃腸神経より御道に入り、十年間弱体、土佐の神宮の娘来りて、予の家伝来の薬、食塩を二時間焼き（紙に包みて）、これを白湯に入れて飲

むこと三年、全治す⁽²⁴⁾」と記しているが、同病に苦しんだ経験を持つ片山会長の同情は深く廣池の心に浸透し、廣池も片山会長の提案に耳を傾けたのではないだろうか——しかし、廣池の本島行きは、片山会長が廣池に示した「同情」だけで成立したものでないことも、明らかである。

この点については、すぐ後で考察することにするが、その前にこの交渉が行われたであろう時期の廣池の様子を見ておくことにしよう。

高松の講演の前後における体調は、『日記』に、「去る「大正八年二月」九日、徳島より発熱。池田にて倒れ、五日滞在。やや快方。それより高松、観音寺二大講演。およそ二時間半ずつ。発熱止まず。三月三日、始めてまず解熱⁽²⁵⁾」と、記されている。

この時期の状況は重要なので、当時の資料を追加してさらに詳しく跡づけておきたい。

私は去る「大正八年」二月七日徳島県小松島の講演を済ませて、同月九日徳島市で開演した。処が、同市では三宅知事を初めとして三千余の聴衆あり、場内立錐の余地だになき為め、障子を明け放つて屋外からも聞くと云ふ有様であったから、私も一生懸命になつて大声を出しました、これが為め咽喉を痛め、発熱するに至りました、それで其儘養生して居れば、今日の如き大打撃は受けなかつたのでありませうが、何分、自分は予てよりの主義として居る犠牲的の心事行為は、物事をよい加減にして其場を過ぎすと云ふ事は出来ません、其場で倒れる迄奮闘し、其奮闘が原因となつて再び起つ事が出来ないやうになるにしても、遣り得る限りのベストを尽くすと云ふ事が最高道德の真理に相違ないと云ふ確信を以て居りますから、徳島市で受た打撃にも恐れず、更に富岡に転じ、池田に移つて、益々精力を出したの

で、同月十三日にはついに大熱を發し、これが為め已むなく香川県の講演は一日中止した。けれども、矢張り犠牲の觀念から、どうしても之を済ませたいと思ふたので、遂に池田より十数里の山の中をしかも雪の中を香川県に赴き、高松、観音寺等の予定講演を完了させたのであります。斯て其結果は、県の有識者、特に坂田知事の意見と私の意見とは全く合致したのであります。……三月八、九の両日に亘り同知事から通知を發して、県内有力者千有余名を県會議事堂に招待し、私の講演を聞かされたのであります。斯様な訳で、其効果は意外に大きく、香川、徳島両県下の知事、富豪、資本家を初め、両県下の有識者を殆ど総て風靡したるが如き觀があります。一方、事業の上の御守護は斯の如く偉大なりしにも不拘、他方身上の方は予想したるが如く極度の衰弱に陥つて了ひ、遂に高松の玉藻宣教所で、一ヶ月余も静養するの已むなきに立至つたのであります。⁽²⁶⁾

また、三月二十日の「日記」の記事も示しておこう。

先日来、引き続き發熱三十七度一、二分。脈拍八十内外、少なきときは七十内外。十六日、講話。十四日より鶏卵を食し、十六日に至つて三十六度八分に下る。十七日、同上。十八日、午前三十七度九分。原因、入浴の上、酒一杯飲みしゆえならん。夕刻、三十六度七分。十九日、三十六度二分に下る。この日、カルシウムの注射をなす。二十日朝より腹痛、且つ右の肩痛む。去る十日夜のセンギ(疝氣)と同様ならん。香川県公会堂において講演会に付き、香川県知事坂田幹太、同内務部長岸本正雄、同理事官内海忠司、善通寺司令官藤田禎一郎、同十一師団參謀長上原平太郎、玉藻宣教所信徒窪川秀、妻チカ、荒木

ナミ。⁽²⁷⁾

廣池が病氣を押して、体調の悪い中、必死に回復に努めながら講演活動を行っている様子が読み取れる。ここでこれらの記事の中に本島行きの記事を位置づけ、日付順に整理してみよう。

- 二月七日 徳島県勝浦郡小松島町小松島支教会に滞在して小松島公会堂で講演、聴衆七百人。
- 二月八日 徳島県徳島市前川町天理教徳島支庁。
- 二月九日 徳島市千秋閣で「人類の平和と幸福」と題して講演、聴衆三千余人。このとき「咽喉を痛め發熱」。
- 二月十一日 徳島県那賀郡富岡町阿南分教会に滞在し、劇場で「人類の平和と幸福」と題して講演。聴衆二千五百人。
- 二月十三日から一八日まで 徳島県三好郡池田町上池宣教所に滞在し郡会堂で「人類の平和と幸福」と題して講演。聴衆千余人。「池田にて倒れ、五日滞在。」
- 二月十九日 「やや快方」、「出立。」
- 二月二十日 香川県高松市玉藻宣教所に滞在し、公会堂で「人類の平和と幸福」と題して講演。聴衆千余人。「發熱止まず。」
- 二月二十三日 香川県三豊郡観音寺町三豊支教会に滞在し、公会堂で「人類の平和と幸福」と題して講演。「發熱止まず。」
- 二月二十七日 「香川県仲多度郡本島村、本島支教会に渡る。」

二月二八日 「本島に渡る。」
 三月一日から四日まで 本島支教会で講習会
 三月三日 「始めてまず解熱。」
 三月八、九日 「香川県地方課、地方改良講演す。毎日一千人以上。」
 三月一〇日 「センキ」
 三月一四日 「十四日より、鶏卵を食し。」
 三月一六日 「講話」、「三十六度八分に下る。」
 三月一七日 「同上。」
 三月一八日 「午前三十七度九分……夕刻三十六度七分。」
 三月一九日 「三十六度二分」、「カルシウムの注射をなす。」
 三月二〇日 「腹痛」、「右の肩痛む。」

廣池は、この間一ヶ月以上にわたって体調を崩していたが、本島に行き五日目で一旦、解熱している。しかし、実際には、このあと高松の玉藻宣教所で養生したがよくならず、三月二十七日に天理教本部に帰っても発熱が続き、四月三日に東京に帰り、注射をはじめさまざまな治療法を試み、五月二十五日に至ってようやく病の状態を脱したのであった。

本島からの招聘はこのような状況の中で行われたのであった。

ここで改めて、廣池が本島行きを承諾した理由について考察しておくことにしよう。

廣池は、本島行きの理由として、「本島会長の主義、予と符合の結果、大正八年より本部の許可にて本島に行く⁽²⁸⁾」と記している。
 片山会長は、どのような「主義」の持ち主であったのだろうか。ここでは布教と、モラルサイエンスに対する考え方を取り上げて、片山会長の「主義」を探っておくことにしたい。
 まず、布教に関する考え方である。

さて、片山好造は教師を多量に作ったが、しかしそれだけではなかった。殊に鮮満に道を伸ばし、その方面を巡教し常にその先頭に立っていた関係上、教義の説き方を何処の世界にも通ずるものにしなければならぬことを痛感していた。どの宗教にも地方的、時代的なものの脱皮が必要であったごとく、天理教にもそれがなければならぬことを感じていた。

そのためには、一般社会の学問を研究し、それを教師に勉強させ、何処にも通用する教師にしなければならぬと思った。それで彼は部内の教師を本島に集めて、世界に通用する道を説いていた。⁽²⁹⁾

このように、片山会長は、天理教の教義の説き方に対しても、また、布教師の教育に関しても、「世界に通用する道」を求めていた。

一方、その当時、廣池は、天理教教理の研究に加えて、大正元年に神に誓いを立ててスタートさせたモラルサイエンスの研究において、構想がほぼ出来あがりつつあった。大正七年十二月十七日に神戸商工会議所で行った講演の中で、廣池は、「最近科学を総合して此の新科学を樹立せんとして居るのであります、私は学者として敢て出来上つたとは申しませぬが兎に角私の立場としてはモラルサイエンスの曙光を認め得た

と言ひ得るのであります⁽³⁰⁾と明確に語っている。道德科学研究センター廣池千九郎研究室室長の井出元教授は、廣池が「モラルサイエンス」完成の暁には、一度欧米に布教して道德の効果を実証したいというような国際的な視野を持って「いたこと、また、「そのへんを理解してくれたのが片山会長であり、海外布教の拠点である本島教会だった」と述べている⁽³¹⁾。

ここに、布教に關し「世界に通用する道」を求めていた片山会長と、「一度欧米に布教して道德の効果を実証したい」と考えていた廣池の「主義」の一致点を、見出すことができるのではないだろうか。

片山会長は、廣池のモラルサイエンス研究をどのように評価していたのであろうか。これは、大正十二年に、片山会長が廣池に語った言葉であるが、片山会長のモラルサイエンス評価を的確に述べたものであり、先の「本島会長の主義、予と符合の結果」という言葉の背景を窺い知る上でも参考になるものと思われる。

天啓に、神の話を聴き世上世界の理を見て悟れとあり。天理教は神の話をすれど世上のことを知らず。そこでモラルサイエンスは、この世上世界の理を科学的に現わして神の話を証明するものなり。この二者合致の暁ならでは、御道は權威出来せず、世界平和の本は立たず⁽³²⁾。

ここに、「神の話」をする天理教は、「世上世界の理を科学的に現わして神の話を証明する」モラルサイエンスを必要としており、両者が合致しなければ天啓をもって語られた教祖の真の教えは現出してこないとする、片山会長の洞察が述べられている。

大正八年九月二日の「日記」には、廣池が長男千英に片山会長の「志」を説明した一節がある。この記述

から、片山会長が廣池を本島に招聘したいと願ひ、廣池に繰り返しアプローチしていたときの心を、廣池がどのように受け止めたのかを窺い知ることができる。

本島にては、予の窮境と予の将来世界の人物なるとの二点を察し、本部と部下とに代わりて予の窮境を助くるにあり、決して救助にもあらず、また本島に予を引き付けるにもあらず、神様へ供え、人心救済に供えたるものなり、云々の本島会長の意志を千英に申しやりしなり。／○本島会長の志は右のごとし⁽³³⁾。

片山会長は廣池に、本島招請の希望を、「神様へ供え、人心救済に供え」る心で、「本部と部下とに代わりて……窮境を助」けるのであって、単なる一時的「救助」でもなければ、「本島に引き付」けるためではないと説明し、粘り強く交渉を繰り返したのであろう。

片山会長の「志」をこのように受け止めた廣池は、続けて、次のように記している。

しかし予は、必ず本島のためになることを特に図るべし。これ因縁深きところにより合うこととなるのは当然のことなればなり⁽³⁴⁾。

この「因縁深きところ」という言葉に廣池は、どのような意味を込めたのであろうか。小野松枝氏が遠い縁戚関係者だったということであろうか、片山会長の神経衰弱が自分の病と同じだったということであろうか。

か、布教に対する見解の一致であろうか、また、モラルサイエンスに対する片山会長の理解であろうか。何れにせよ、廣池はこれから五年数ヶ月に亘って、本島の人々と密度の高い交流を持つことになるのである。

注

- (1) 本島支教会は、その後、大正十四年四月十八日に分教会、昭和十五年一月二十三日に大教会に昇格した。天理大学おやさと研究所編『天理教事典』天理教道友社、一九七七年、七七三―四ページを参照。
- (2) 詳しくは、廣池千九郎『新版 道徳科学の論文1』（広池学園出版部、一九二八年十二月二十五日初版発行、一九八六年四月五日「新版」第一刷発行。以下、「論文1」と略す）の第一章第四項「予の道徳科学の研究を思い立てる動機及び理由一、二、三」（七―四〇ページ）を参照。
- (3) 廣池千九郎「回顧録」広池学園出版部、一九九一年、二七―八ページ。以下、「回顧録」と略す。
- (4) 「回顧録」三二―三三ページ。
- (5) 「回顧録」六二―四ページ。
- (6) モラロジー研究所編『資料が語る 廣池千九郎先生の歩み（改訂版）』広池学園出版部、一九七三年初版発行、一九八二年改訂初版発行、三二―五ページ。
- (7) 廣池千九郎「廣池千九郎日記1」広池学園出版部、一九八五年、三二―四ページ。以下、「日記1」と略す。
- (8) 「日記1」三一九ページ。
- (9) 廣池千九郎「廣池千九郎日記2」広池学園出版部、一九八六年、三ページ。以下、「日記2」と略す。
- (10) 「日記2」二七―七ページ。
- (11) 「日記2」一七七―七ページ、四月二十八日。
- (12) 「遺稿」。
- (13) 「遺稿」。
- (14) 「遺稿」。
- (15) 「遺稿」。
- (16) 中西史郎「本島大教会道あけの人 片山好造私史」発行者中西史郎、印刷天理時報社、一九九一年、一三〇―一三三ページ。以下、「片山好造私史」と略す。本書は栃木県でモラロジーを研究されている伏木利夫氏から、一九九六年の暮れに頂戴したものである。今回本書をこのような形で研究材料として使わせていただくことが出来たことに感謝申し上げます。
- (17) 道徳科学研究所研究部編『研究ノート12 廣池博士資料調査報告集II 昭和三十三年四月―昭和三十八年三月』（以下、「研究ノート12」と略す）三三九―三九ページ。「第26回

廣池博士資料収集調査報告 天理教本島支教会「博士の部屋」調査による。

- (18) 中西史郎「片山好造私史」一九六六―七ページ。
- (19) 「研究ノート12」三二―四ページ。
- (20) 高野友治「伝道者」道友社出版、昭和二十年（一九四六年）、二〇八―九ページ。
- (21) 道徳科学研究所研究部編『研究ノート11 廣池博士資料調査報告集I 昭和三十一年十月―昭和三十三年二月』（以下、「研究ノート11」と略す）五八―九ページ。「第2回廣池博士資料収集調査出張報告 天理大学（図書館）並びに天理教教会本部行」による。
- (22) 「研究ノート12」二八―四ページ。
- (23) 「研究ノート11」五八―九ページ。
- (24) 「日記2」一六八―九ページ、大正八年三月八、九日。
- (25) 「日記2」一六八―九ページ。
- (26) 「廣池博士病床閑話」『斯道』第五五号、大正八年四月号。
- (27) 「日記2」一七一―二ページ。
- (28) 「遺稿」。
- (29) 高野友治「伝道者」二〇七―八ページ。
- (30) 廣池千九郎「廣池博士講習録」編輯兼発行者山本千代蔵、大正八年（一九一九年）四月一日、三四―三三ページ。
- (31) 廣池学園出版部編「遙かなる悲願」一九八五年、一一

五―六ページ。

- (32) 廣池千九郎「廣池千九郎日記3」広池学園出版部、一九八六年、五一―二ページ。以下、「日記3」と略す。
- (33) 「日記2」二二〇―二二二ページ。
- (34) 「日記2」二二〇―二二二ページ。

*本稿の草稿に目を通していただき、貴重なコメントをいただきました。麗澤大学外国語学部教授であり、モラロジー研究所の廣池千九郎記念館副館長・道徳科学研究センター廣池千九郎研究室室長である、井出元教授に感謝いたします。